語彙指導を目指したカタカナ語の指導の試み

－韓国人日本語学習者の場合－

畑ゆかり[*]・山下直子[**]

（e-mail: [*]rock1flat@yahoo.co.jp・[**]nyamash@ed.kagawa-u.ac.jp）

目　次

１．はじめに
２．先行研究
３．研究方法
４．結果と考察
５．まとめと今後の課題

１．はじめに

外来語などのカタカナの氾濫が問題にされるようになって久しい。文化庁の平成19年度「国語に関する世論調査」[1)]においては、８割を超える人が外来語や外国語などのカタカナ語が多いと感じることがあると答えている。このカタカナ語は、武部（1980）が「片仮名と平仮名との間には文字の種類や用い方においていろいろの異同があり、そのことが日本語学習者を悩ませている」と述べているように、日本語学習者にとっても習得が難しいものの一つである。しかし、多くの学習者がカタカナ語を苦手とすることは認識されていながら、漢字学習等に比べてカタカナ語に関連する研究は多いとはいえず、陣内（2008）は「カタカナ教育の議論がまだ初期の段階」であるとする。

＊　韓南大学校　日語日文学科　常勤講師　日本語教育学
＊＊　香川大学　教育学部　准教授　日本語教育学

1)　文化庁のホームページの「平成19年度『国語に関する世論調査』の結果について」のカタカナ語使用に関する意識の調査結果を参照
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h19/kekka.htm（2010年11月19日）

www.kci.go.kr

実際に日本語教育の現場では、十分な指導がされているとは言えないようである。金城（2001）は留学生への質問紙調査からカタカナ語の問題は重大であり、「大学の教育課程でカタカナ語彙教育を行う必要がある」としている。日本語学習システムの開発を行った盧他（2007）では、カタカナ語の学習支援の必要性を明らかにし、学習者がIT関連の用語だけでなくより広い範囲での学習を望んでいることを指摘している。中山他（2008）は日本語教師、学習者への質問紙調査を行い、多くの学習者がカタカナに苦手意識を持ち教育を必要としているが、実際の教育現場では他の文字や語彙と同等には扱われておらず、「教師の意識改革及び教材や教授法の開発が急がれよう」と述べている。

カタカナ語の使用が増加する中で、日本語学習者もカタカナ語を避けることはできず、効果的な学習を支援するための指導法や教材の開発は急務であるといえよう。今後、カタカナ語について調査研究を行い、実証的な検証を積み重ねることが重要であると考える。そこで、本研究では、先行研究の結果から困難が予想される拍に焦点をおいたカタカナ語の指導がどのような影響を及ぼすのか検証し、カタカナ語の効果的な指導を探る。

なお、カタカナ語とは、カタカナで表記される言葉を指す。カタカナで表記されるものは、外来語（外国語）が一般的であるが、日本独自の和製外来語もあり、さらに、非外来語がカタカナ表記されることも増えているため、本研究では、それらすべて含むカタカナ語を用いる。

2．先行研究

2．1　カタカナ語に関する先行研究

カタカナ語の難しさはどこに起因するのであろうか。石綿（2001）は「外来語は日本語のなかに同化するにつれて、日本語化し、変容する」が、「発音、文法、意味といろいろな面で英語などとずれを生じている」と、さまざまな面でのずれを指摘する。そのためカタカナ語を学ぶにはさまざまな困難点が予想される。日本語化したため表記や発音は特殊なうえにゆれがある。意味や用法も原語とのずれがあり、全く意味の異なる場合もあれば意味の拡大や縮小も起こる。略語も多く、和製英語など日本で独自に作られた語もあり、さらに、日々新語が生まれる一方で消えていく語もある。

カタカナ語の表記に関しては、馬瀬・中東（1998）が韓国語母語話者、中東（1998）が韓国語母語話者とブラジル・ポルトガル語話者を対象とし、英語を与えて外来語を書く調査を行い、学習者の外来語表記には母語の影響が著しいことを明らかにしている。母語での外来語の影響もみられ、李（1999）では、韓国語話者の日本語の外来語表記への韓国語外来語の影響について考察し、「日本語の学習時間の長短にかかわらず

www.kci.go.kr

韓国語の外来語表記の影響が見られた」という。また、恩塚（2004）では、カタカナは日本語の和語や漢語にはない音節を表記するところにカタカナの難しさがあると指摘し、従来の50音図に特別な組み合わせの外来語音を足した「カタカナ表記表」の重要性を述べている。

カタカナ語の成り立ちや言語習得上の問題だけでなく、心理的な要因も影響を与えると考えられる。武田（2002）はアンケート調査から、留学生は「カタカナそのものに苦手意識を持」ち、「カタカナ語を苦手とするのは、その膨大な数に加えて『本当の言葉』ではないという意識が強いためではないかと推測」している。堀切（2008）においては、英語を母語とする日本語学習者に質問紙調査を行った結果、学習者の外来語に対する苦手意識は特有なものであり心理的な影響が大きいことを指摘している。その中で、外来語の聞き取りに対して習得困難を感じ、外来語使用に抵抗を強く感じるほど、外来語を拒絶する態度になりやすいことを明らかにしている。また、山下・品川（2009）でも、留学生の講義理解において、音と表記の結びつきが難しいカタカナ語が問題となるとしている。これらのことからも、カタカナ語の聞き取りの難しさが指摘できよう。

指導の第一歩として、このカタカナ語を「聞く」ことに着目して、畑・山下（2008）、畑・山下（2010）では、留学生を対象としてカタカナ語を聞いて書きとる調査を行い、学習者が直面している問題点を探った。得られた誤用を分析した結果、長音や促音等の特殊拍と濁音・半濁音に関する誤りが多いことがわかった。特に、本研究で対象とする韓国人学習者に関しては、長音の誤りが最も多く6割を超えるなど特殊拍の誤りが多かった。

２．２　特殊拍に関する先行研究

特殊拍に関しては、これまで多くの研究が行われ、日本語学習者の特殊拍には問題があることが指摘されており、母語に関わらず習得が困難であるという（戸田2003他）。韓国語母語話者についても、松崎（1999）は音声教育研究の観点から発音の誤用に対するさまざまな解釈を考察し、韓国語話者の発音の特徴として長音、促音や撥音の問題をあげている。

特殊拍の知覚に関しては、アクセントや語音位置など多くの要因に影響を受けることが明らかになっている。李（1990）は初・中級の韓国語を母語とする学習者に聞き取り調査を行い、初級の文レベルでのみ語頭の誤りが多かったが、そのほかは語末位置での聞きとりが難しいとしている。閔（1993）は韓国語を母語とする学習者を対象に促音の聞き取り調査を行い、発音や聞き取りの訓練を積まなければ同定能力は向上しないとしている。皆川他（2002）は英語話者と韓国語話者の長・短母音の同定においてアクセントと音節位置の影響を検討し、両者共に語末位置での長母音の知覚が難しく、語末位置でピッチ型が影響を及ぼすと述べている。小熊（2008）では、英語話者を対象とし、単語中の長音位

www.kci.go.kr

置では「語末」「語中」「語頭」の順に聞き取りが難しく、アクセント型の高低変化は上級学習者の知覚には影響し、その難易は「低低」「高低」「高高」「低高」であるという。また、音声指導の長音と単音の弁別能力に及ぼす効果についても探り、訓練群の学習者の成績は向上しており「成人にとっては明示的かつ意識的な音声指導が有効である」と述べている。

特殊拍の難しさはカタカナ語に限ったものではないが、漢字表記できる語と違って、表音文字のカタカナ語の場合は、正確に把握していなければならないため、特殊拍の難しさが顕著に現れると思われる。本研究では学習者にとって困難であると予想される長音を中心として拍に焦点をおいたカタカナ語の指導行い効果を検証し、指導がどのような影響を与えるかを探る。

3．研究方法

3．1　調査対象者

調査対象者は、韓国忠清道にある大学で日語日文学科 2 年生を対象に開講している日本語会話のクラスの受講生35名（男性 7 名、女性28名）である。全員、日本語総学習期間が一年以上の初級レベルを修了した学習者で、韓国語母語話者である。

カタカナ語彙指導の効果を測るため、これら35名の学生を、ほぼ同じ言語環境にある指導を受ける群（指導群19名）と、指導を受けない群（統制群16名）の 2 群に設定した。

3．2　調査方法

畑・山下（2010）では、日本国内の大学に在籍する留学生を対象に、『日本語能力試験出題基準』（2002）に掲載されている 4 級語彙[2)]から35のカタカナ語を抽出し、聞き取り調査を行った。その結果、長音や促音等の特殊拍の誤りと濁・半濁音の誤りが多くみられた。そこで、本研究では、最も誤りの多かった長音を中心に26語を精選し、指導前のプリテストとして、カタカナ語を 2 回聞かせ、シートに書かせた。調査語彙は次の26語である。エレベーター、カレンダー、ギター、コート、コーヒー、コップ、コピー、シャツ、シャワー、スプーン、ズボン、スリッパ、セーター、タクシー、テーブル、デパート、ナイフ、ニュース、ネクタイ、パーティー、フォーク、ベッド、ボールペン、ポケット、ボ

2) 国際交流基金・日本国際教育協会（2002）『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社、11-20の4級語彙から抽出した

www.kci.go.kr

タン、マッチ。

プリテスト後、２群のうち指導群には、カタカナ表記、拍に焦点をおいた指導を毎週１回、全３回（初回20分、他２回は10分程度）行った。一方、指導の効果を調べるため、統制群には表記、拍に関する指導を行わなかった。指導後、両群にプリテストと同じ語彙の聞き取りのポストテストを行い、比較、分析した。

次に、ポストテストの後、カタカナ語、カタカナ語学習に関する意識調査を行った。その結果、調査対象者35名のうち、24名から回答を得ることができた。これは中山（2006）を参考にした質問紙調査で、カタカナ語の難しさやカタカナ指導の必要性などについて尋ねたものである。さらに、必要に応じてフォローアップ・インタビューを行った。

３．３　指導内容

先行研究や発音指導等の教材を参考に次のような活動を行った。初回では、プリテストの調査シートを調査対象者に返却し、誤答と正解を確認させた。誤答の表記にある一定の傾向を持つ学習者には、調査シートにその誤答に関して注意を促すようコメントを記入した。これは調査対象者に誤用を意識化させるためである。次に、「ン」と「ソ」、「ツ」と「シ」、「せ」と「セ」、「や」と「ヤ」といった基本的な表記に関する初歩的な間違いが多くみられたため、練習シートを作成し、書かせた。このとき、カタカナにはひらがなにない拗音（「ティ」「ウェ」「フォ」など）があること、また、調査対象者の誤用に多くみられた「ッン」「ンー」が存在しないことについても説明した。さらに「カレンダー」「シャワー」「エレベーター」など語末の長音の誤用が多かったことから、原語である英語のスペルから長音記号の有無を類推するよう指導した。

二回目の指導では、拍感覚を身に付けさせるため、プリテストで使用した長音を含む語を中心に、拍数を数えさせた。その際、調査対象者に一拍ずつ指を折りながら拍を数えるよう、指示した。また、表記にも注目できるよう単語カードを使用し、繰り返し読ませた。

三回目の指導では、拍数とアクセントの位置に注目させるため、小熊（2008）での指導を参考にプリテストで使用した長音を含む語の各音節を「ラ」の音に置き換えて読ませた（「デパート」の場合、「ララーラ」と読む）。その後、カナカナ語彙を聞かせ、どの長音配置パターンか当てさせた。

３．４　分析方法

調査対象者にカタカナ語を聞いて書かせた計1820のデータから誤答を採取した。一つの語の中に複数の誤用が現れた場合、それぞれを一つの誤用とした。次に、これらの誤用を表１のように15の基準に分類し、集計した。分類基準は、必要な長音等が欠落したものや必要のない箇所に余分に挿入されたもの、母音や子音の間違い、平仮名を使うなどの表記上の間

www.kci.go.kr

違い、一文字が空白であるものとそれらの基準にあてはまらないものである[3)]。また、誤用が語頭、語中、語末のどの位置に現れるかによっても分類、集計した。ここでいう語頭とは第一拍の音節を指す。長音は、第一拍にある短母音が長音化した場合、誤用が生じた位置が第一拍であることから、語頭の誤用と分類する。例：スープン（スプーン）。

表1　分類基準

	基　準	誤用例（正答）		基　準	誤用例（正答）
1	長音の欠落	コーヒ（コーヒー）	9	濁音・半濁音の欠落	ホケット（ポケット）
2	長音の挿入	コーピー（コピー）	10	濁音・半濁音の挿入	ナイプ（ナイフ）
3	促音の欠落	スリパ（スリッパ）	11	母音の変化	スポーン（スプーン）
4	促音の挿入	ネックタイ（ネクタイ）	12	子音の変化	ストーグ（ストーブ）
5	拗音の欠落	ニース（ニュース）	13	表記	セーター（セーター）
6	拗音の挿入	ティーブル（テーブル）	14	一字欠落	ス　ッパ（スリッパ）
7	撥音の欠落	ズーボ（ズボン）	15	その他	
8	撥音の挿入	ボンタン（ボタン）			

4．結果と考察

4．1　指導群と統制群のテスト結果

表 2 は、指導群と統制群のプリテストとポストテストの平均誤用数、標準偏差と全体の誤用数を示したものである。まず、指導群と統制群のプリテストの結果を比較するためt検定を行ったところ、両群の平均に有意な差はみられなかった（両側検定：$t(33)=0.37$、$p>.10$）。したがって、指導群と統制群は、カタカナ語の聞き取りにおいて指導前には、ほぼ同等の能力であるといえる。

3) カタカナの表記に関してはゆれもみられ、どこまで許容するかについては検討が必要であるが、ここでは、『日本語能力試験出題基準』での表記を正解とした

www.kci.go.kr

表2　テストの平均誤用数と標準偏差（全体の誤用数）

	プリテスト	ポストテスト
指導群　N=19	7.0・7.83（133）	3.3・2.79（ 63）
統制群　N=16	8.0・7.98（128）	7.8・5.19（124）

図１に指導群と統制群の平均誤用数の変化を示す。プリテストとポストテストの平均誤用数は、指導群では7.0から3.3と半数以下に減少したが、統制群では8.0から7.8とあまり変化はなかった。群内でテスト間の差を調べるためt検定を行った結果、指導群ではプリテストとポストテストの平均の差は有意であったが、統制群では有意ではなかった（両側検定：指導群t(18)=0.37、p＜.05、　統制群t(15)=0.91、p＞.10）。したがって、指導群においては指導後に誤用が減少し成績が上がったといえる。

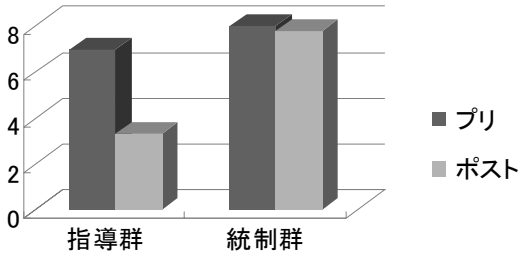


図1　指導群と統制群の平均誤用数の変化

４．２　誤用の分類結果

３．4の基準によって誤用を分類したプリテストの結果を図２に示す。長音に関する誤りが指導群77・統制群70と両群ともに最も多く、全体の56.3％を占め、次いで、濁音・半濁音19・18（両群の誤用数全体の14.2％）、拗音13・12（9.6％）、促音9・13（8.4％）、母音7・3（3.8％）、撥音1・4（1.9％）、表記2・3（1.9％）、一字欠落1・3（1.5％）、子音2・0（0.8％）である。それぞれ欠落、挿入等に分けてみると、長音の欠落が最も多く指導群53・統制群47（38.3％）、次いで、長音の挿入24・23（18.0％）、濁音・半濁音の欠落12・12（9.2％）、拗音の欠落9・7（6.1％）濁音・半濁音の挿入7・6（5％）である。両群ともに同じような誤用の傾向であることがわかる。

www.kci.go.kr

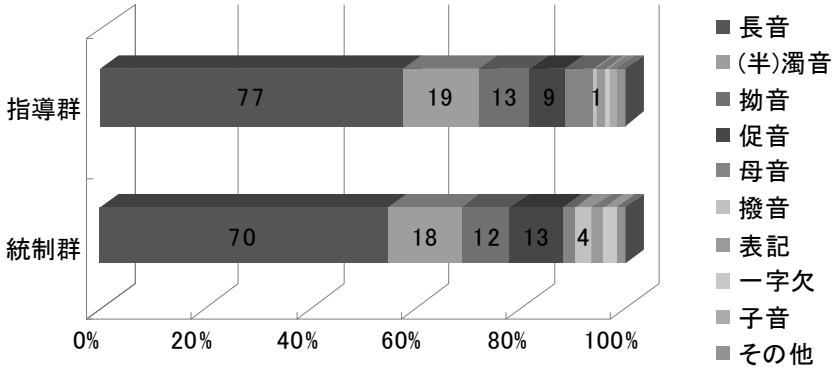
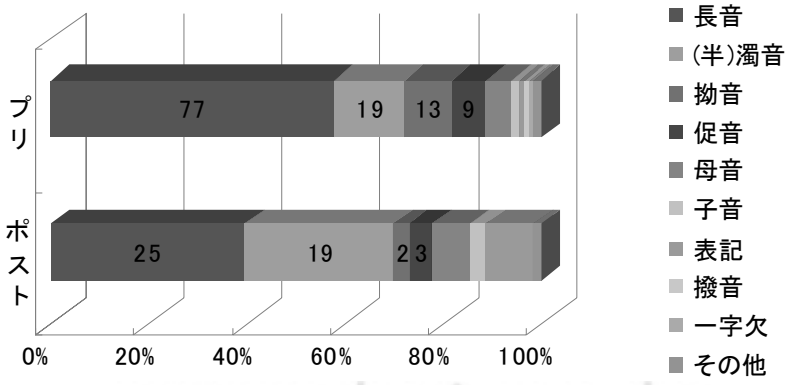


図2　プリテストの誤用の分類結果

指導群のプリテストとポストテストの誤用を分類した結果の割合の変化を図３に、誤用数の変化を図４に示す。全体の誤用数の減少に伴って、おおむねどの誤用も減少しているが、誤用の種類によって差がある。プリテストで最も誤用の多かった長音の欠落は全体の誤用数が53から12と減少し、正解率が最も改善されており、長音の挿入でも24から13と約半数に減少している。拗音、促音や撥音などその他の特殊拍に関しても減少している。一方、濁音・半濁音では、挿入は７から５と減ったものの、濁音・半濁音の欠落は12から14と増加している。また、表記も２から６へと増加している。そのため、全体の誤用の割合は変化し、プリテストでは長音の欠落が53（39.8％）と最も多く、欠落と挿入を合わせると77（57.9％）と誤用の半数以上を占めたが、ポストテストでは、長音の欠落と挿入は25（39.7％）と割合が少し、一方、濁音・半濁音の誤りが19（30.2％）で、半濁音の欠落が14（22.2％）で最多の割合を占めた。



www.kci.go.kr

図3　指導群の誤用割合の変化

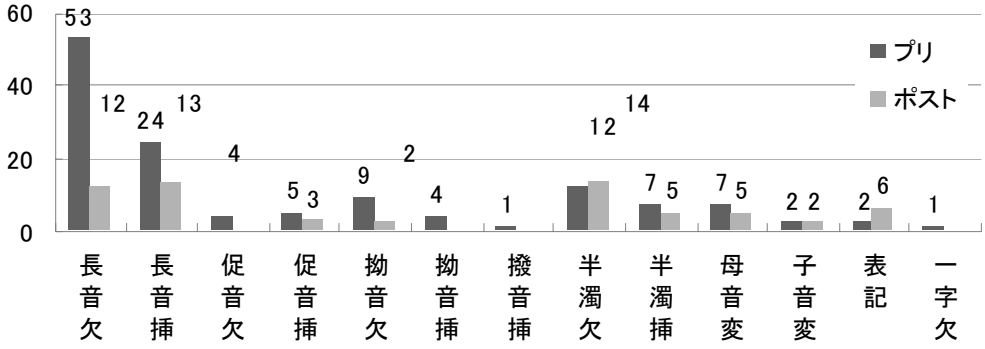


図4　指導群の誤用数の変化

さらに、指導群での誤用の現れる位置の語頭、語中、語末で分類した誤用の変化を図５に示す。プリテストとポストテストを比べると、語頭で44から21、語中で31から16、語末で56から25と、どの位置でも誤用数は半数前後に減少している。語末では、長音の誤用が40（71.4％）と7割を超え最も多かったが、10（40.0％）と大幅に減少した。一方で、濁音・半濁音の誤りは12（21.4％）から12（48.0％）と変わらず、割合としては最多を占めるようになった。語頭では、最も多かった長音が17（38.6％）から5（23.8％）となるなど多くの誤用が減少したが、表記のみ2（4.6％）から6（28.6％）に増加して、割合に大きな差はみられなくなった。以上のように、語末・語頭では分類間の割合に変化がみられた。しかし、語中では、濁音・半濁音が1（3．0％）から3（18.8％）と増加し、逆に、長音の誤りは20（64.5％）から10（62.5％）と減少したものの依然として割合は6割を超える結果になった。

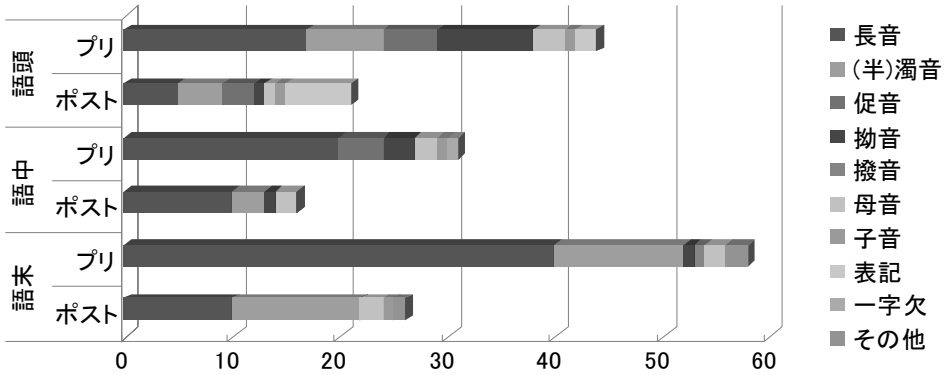


図5　位置別の誤用数の変化

www.kci.go.kr

４．３　指導群の誤用の変化

以上の結果から、指導群において誤用が減少し誤用の割合に変化がみられることが明らかになった。次に、具体的な誤用例も挙げながら変化をみていきたい。

まず、最も多くの誤用がみられた長音に関して、プリテストで誤用が多い語を挙げると、「スプーン」「パーティー」「コピー」「カレンダー」という順になる。これらの語を見てみると、「パーティー」のような一語の中に長音記号が二つ入っている語、もしくは「スプーン」「カレンダー」のような撥音が含まれている語である。長音記号が二つ入ることや同時に他の特殊拍も含むことで、拍がうまく理解できず誤用につながったものと思われる。

例えば、「スプーン」の場合、誤用数は11から7と減少したが、最も誤用が多い語である。「スプン」と単に長音が落ちるものに加えて、「スープン」「スプンー」といった長音記号が前後する（ずれる）誤用がみられた。拍数は正しく把握されて、語のどこかに長音が含まれていることは理解しているが、どの位置に置かれているかが正しく把握できていない。一語に撥音と長音のような特殊拍が複数含まれている場合は、より拍感覚が鈍り、誤用が起きてしまうのではないかと考えられる。

長音の誤用の現れる位置でみると、プリテストでは語末40（長音の誤用の51.9％）、語中20（26.0％）、語頭17（22.1％）と語末での誤用が半数を超えた。また、語頭と語中では、それぞれ欠落10・挿入7、欠落11・挿入9とほぼ同じ割合だったのに対し、語末は欠落32・挿入8と欠落が8割を占めた。先行研究でも語末位置での長音の聞き取りが難しいとされているが（皆川他2002、小熊2008）、本調査でも同様の結果が得られ、語末位置での長音を認識できない可能性が大きいことが明らかになった。調査後のフォローアップ・インタビューでも長音に関する意見は多く、「長音を使うか使わないか分からない場合が多い」、「どの部分に長音記号をつければいいかわからない」という声が上がった。しかしながら、指導後の誤用数は、いずれも語末10、語中10、語頭5と減少している。特に、「コーヒ（コーヒー）」「コピ（コピー）」などの語末の長音欠落は32と全誤用の24.0％を占め最も誤用が多かったが、指導後は9.5％（6）となっている。韓国人学習者にとってカタカナ語においても長音は難しいと思われるが、英語のスペルから長音記号の有無を類推するなどの指導の効果が期待できるといえよう。

一方で、濁音・半濁音に関しては、今回指導を行わなかったためか多くの誤用がポストテストでもそのまま残り、特に、欠落は誤用数が増加し14（22.2％）と誤用全体で最も多くの割合を占めるようになった。「テパート」「カレンター」「ベット」など濁音・半濁音が清音になる欠落、「デーブル」のような清音が濁音・半濁音になる挿入のほかに「ズボン」が「ズポーン」と濁音・半濁音の交替もみられた。これらの誤用は、日本語にある有声音・無声音の区別が韓国語にはないことに起因するもので、拍の指導と同様、効果的な指導を検討する必要がある。

www.kci.go.kr

また、プリテストで誤用の多かった語に、韓国語にない/f/音を含む「フォーク」がある。中東（1998）で外来語では激音/ph/で表記するために英語/f/をパ行のカナで表記した者が多かったとするのと同様に、本調査においても「フォーク」を「ポーク」、「ポォク」とする例もみられた。他にも「ホーク」「フォク」などさまざまな誤用がみられた。指導後は誤用数が10から2と減少したが、インタビューでもひらがな表記にはない「フェ」やVの音など「どう書いたらいいかわからない」という意見があったことから、今後この点についても指導が必要であると思われる。

今回の指導で、基本的なカタカナの文字に関する初歩的な間違いには触れたが、指導後も一部の調査対象者に表記に関する誤用がみられた。インタビューでも「『ン』『ソ』『ツ』『シ』など似ている文字の認識が難しい」、「一番難しいのは聞いて書くこと」など、表記の難しさを述べる意見も多く、短時間の指導では効果が出にくいようである。「以前、カタカナは重要じゃないと思っていた」というコメントもあり、ひらがなを覚えた段階で日本語の表記をすべて覚えたと満足してしまったり、日本語の中におけるカタカナの重要性が理解できず軽視されがちなのではないかと思われる。そこで、次に、対象者のカタカナ語に関する意識を探った質問紙調査について述べる。

４．４　カタカナ語に関する意識調査

カタカナ語に関する意識調査の結果、これまでのカタカナの文字の学習に関して、学習場所は24名の調査対象者のうち23名が韓国国内で、1名が国外で学習している。16名が日本語の授業（中学・高校・大学・学院）で学び、6名が独学、2名がその他としている。学習時期は、23名が平仮名の後に学習し、1名がその他と答えている。

日本語でのカタカナ語の使用に関しては、「よい」9名、「よくない」が2名、「どちらでもない」が10名、その他3名であった。「よい」の選択理由（複数回答可）は「英語など元の言葉が想像できて、意味がわかるから」6名、「日本語が豊かになるから」4名で、「よくない」の選択理由は「わかりにくいから」2名、「英語など元の言葉と全然違うから」1名であった。「どちらでもない」を選択した理由の自由記述としては,「カタカナを使えば強調したり、もっと意味が明確になったりする一方で、カタカナが乱用されている感じもする」などカタカナ語やカタカナ表記を容認する面と否定的な面の両方に言及するものと、「もともと日本語はひらがなとカタカナで構成されていると思っている」ので問題としてとらえていないとするものがみられた。

難しさに関して、「カタカナ語を覚えたり使ったりすることは難しいか」という問いに対する回答を図６に示す。「そう思う」17名（70.1％）、「あまりそう思わない」7名（29.2％）、「とてもそう思う」「全くそう思わない」はそれぞれ0名であり、7割が難しさを感じている。難しさを感じる回答者にどのような点が難しいか聞いたところ（複数選択）、「原語

www.kci.go.kr

と発音が違う」、「韓国語の外来語と発音が違う」がそれぞれ12名と「正しく書けない」8名などが選ばれた。一方、難しさを感じない回答者では「勉強するのは簡単」5名が最も多く選ばれた。

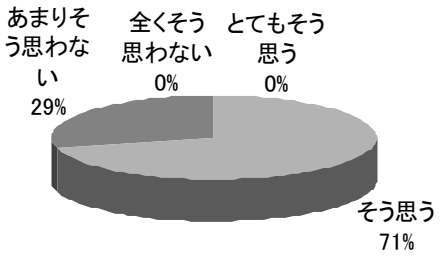


図6　カタカナ語の難しさに対する回答

技能別に難しいと思うかを聞いた問いでは、「とてもそう思う」「そう思う」をあわせた回答者が「聞く」13名、「発音」11名、「書く」9名、「読む」4名となった（図 7 参照）。聞くことが難しいという回答は半数を超え、聞くことに苦手意識を持つ学習者が多いようである。発音のずれから聞くことや発音に、またカタカナ独自の表記であることから書くことにも難しさを感じる者が多いと思われる。

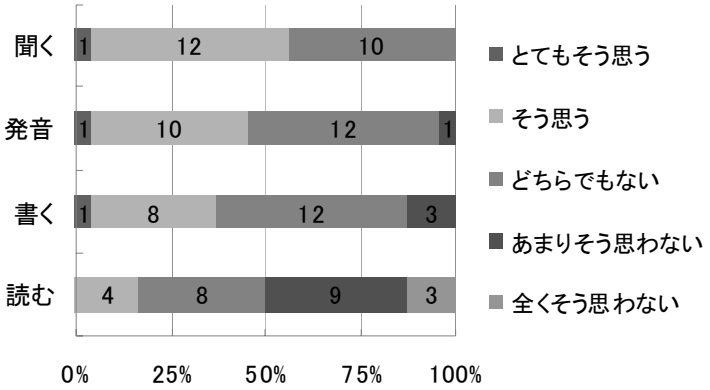


図7　技能別の難しさに対する回答

インタビューでも、カタカナ語の原語（多くは英語）との関連性に関して、「カタカナ語は意味を理解したり、予想したりしやすい」という意見がある一方で、「英語と似ているが、わかりにくい表記と発音に戸惑う」、「発音を聞いた時、もともとの語彙（原語）と全然違う単語に聞こえる」というカタカナ語とのずれを感じると言う声が多数上がった。「興味深い

www.kci.go.kr

し、簡単に理解できる言葉もあるが、我が国の韓国語外来語の発音と違って、聞き取るのが大変」など韓国語外来語とのずれに関する意見も聞かれ、原語である英語や韓国語の外来語との関連が難しさにつながっていると思われる。実際、「シャワー（샤워）」を「シャウァ」、「セーター（스웨터）」を「スウェター」「スェター」、「テーブル（테이블）」を「テイブル」といった英語や韓国語の外来語の干渉と思われる誤用が見られた。

指導に関しては、これまでカタカナ語を学習したのは、「文章読解や会話の日本語クラス」19名、「語彙（単語）を教える日本語クラス」16名、その他1名であった。日本語の授業でカタカナ語を教えてほしいかという問いに対しては、「とてもそう思う」2名（8.3%）、「そう思う」18名（75%）、「あまりそう思わない」4名（16.7%）、と「全くそう思わない」0名という回答であり、カタカナ語の指導を望む者が8割を超え多い（図８参照）。

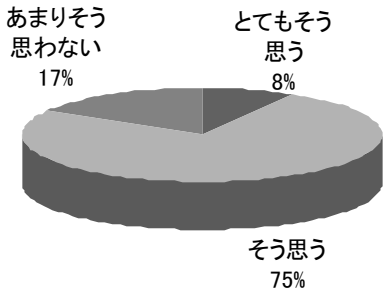


図8　カタカナ語の指導を望むかに対する回答

意識調査とテストの結果を比較すると、カタカナを難しいと思う者のプリテストとポストテストの平均誤用数はそれぞれ7.3と6.4であり、あまり思わない者の誤用数は4.1と1.3であった。難しさを感じる者の誤用数のほうが多く、カタカナ語の難しさに関して、学習者はある程度自覚しているものと思われる。

また、指導を望む者のプリテストとポストテストの誤用数が5.3・3.7であるのに対して、望まない者の誤用数は11.8、11.0であった。指導を望まない4名のうち1名は指導群で、誤用数が7から3へと減少し、カタカナに難しさを感じないとしており指導の必要性がないともいえる。しかし、残りの3名は指導を受けていない統制群であり、誤用数の平均が13.3・13.7と高く3名ともカタカナ語を難しいと答えている。それにもかかわらず指導を望まないのは、間違いが多過ぎるため学習を諦めているとも予想されるが、この点は検証が必要であろう。一方、カタカナ語は難しいと答えた者の8割がカタカナ語の指導を望んでおり、特に、指導を実際に受けた指導群で難しいと思う者は全員が指導を望んでいる。指導を受けてその効果

www.kci.go.kr

を実感したことによって指導を望むようになったのかもしれないが、今回の意識調査はポストテスト後に行ったものであり、指導による意識の変化については言及できない。今後、学習者の意識や指導がカタカナ語の習得にどのように影響を与えるのか、さらなる検討が必要である。

5．まとめと今後の課題

以上のように、カタカナ語の指導効果を探るため、韓国人学習者を対象として長音を中心とした拍と表記に焦点をおいたカタカナ語の指導を行いプリテストとポストテストの結果を比較し効果を検証した。その結果、指導群ではプリテストとポストテストの平均の差は有意であり、指導後に誤用が減少し成績が上がったといえる。指導で焦点をおいた長音は、特に語末長音の欠落などの誤用が大幅に減少した。しかし、長音の誤用は全体の割合からみると依然として高く、濁音・半濁音や表記などその他の誤用もみられた。今後、英語のスペルからの長音の類推や拍を数えることなどで拍を意識させる継続的な指導や、韓国語の外来語との関連も探る必要がある。また、今回は聞き取りテストを用いたが、発話テストやその他の手法も組み合わせて、さらなる指導効果を検証しなければならない。

さらに、意識調査の結果から、カタカナ語に難しさを感じる学習者が多く、その多くが指導を望んでいることが明らかになり、カタカナ語に対する意識が習得に影響を与えている可能性も予想された。カタカナ語に対する意識が習得にどのような影響を与えているかも探ることによって、より効果的なカタカナ語彙の指導法と教材の開発を目指すことを今後の課題としたい。[4)]

www.kci.go.kr

4) 本研究は、平成22年度香川大学奨励研究経費によるものである。

【参考文献】

石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』、東京堂出版。
李炯宰（1990）「韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究－発音および聞き取り上の問題点を中心に－」、『日本語と日本文学』1号、21-38。
李政祐（1999）「韓国語話者の日本語における外来語表記に見られる韓国語外来語の影響」、『日本語教育学会秋季大会予稿集』、193-198。
小熊利江（2008）『発話リズムと日本語教育』、風間書房。
恩塚千代（2004）「カタカナ語の表記指導に関する一試案」、『日本語学研究』第 9 号、103-115。
金城ふみ子（2001）「外国人学生に対する片仮名語彙教育の在り方－大学教育課程－」、『東京国際大学論叢 経済学部編』No.25、41-52。
陣内正敬（2008）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」、『言語と文化』11号、47-60。
武田明子（2002）「カタカナ語の留学生指導に関する一考察」、『マテシス・ウニウェルサス』4巻1号、191-206。
武部良明（1980）「日本語教育におけるカタカナの問題」、『日本語教育』42号、1-16。
戸田貴子（2003）「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」、『音声研究』第7巻第2号、70-83。
中東靖恵（1998）「第二言語学習における日本語外来語表記の実態とその問題点の分析－」、『人間文化論叢』Vol.1、65-75。
中山恵理子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子（2006）『日本語教育現場におけるカタカナ教育の実態調査』17年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)
中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子（2008）日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方、日本語教育、138号、83-91。
畑ゆかり・山下直子（2010）「語彙指導を目指したカタカナ語の誤用に関する分析－留学生に対するディクテーション調査から－」、『教育実践総合研究』20号、25-32。
畑ゆかり・山下直子（2008）「聞き取り調査によるカタカナ語の誤用分析」、『比較文化研究』84号、103-110。
堀切友紀子（2008）「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度」、『異文化間教育』28号、74-86。
馬瀬良雄・中東靖恵（1998）「日本語教育における外来語の表記の諸問題－韓国語母語話者の日本語学習者の場合－」、『フェリス女学院大学文学部紀要』第33号、85-111。
松崎寛（1999）「韓国語母語話者の日本語音声－音声教育研究の観点から－」、『音声研究』第3巻第3号、26-35。

www.kci.go.kr

皆川泰代・前川喜久雄・桐谷滋（2002）「日本語学習者の長／短母音の同定におけるピッチ型と音節位置の効果」、『音声研究』第6巻第2号　88-97。

閔光準（1993）「日本語促音の聴取判断に関する研究」、『世界の日本語教育日本語教育論集』第3号、237-249、深見 兼孝（訳）。

山下直子・品川直美（2009）「講義理解のためのストラテジーに対する留学生の認識－学部留学生への縦断的調査から－」、『言語文化と日本語教育』第37号、1-10。

盧颯・山下直子・富永浩之・林敏浩・山崎敏範（2007）「中国人留学生のカタカナ語聞き取りの弱点に着目したドリル型学習システム」、『教育システム情報学会誌』Vol.24No.4、323－332。

www.kci.go.kr

要 旨

外来語などのカタカナは、日本語学習者にとって学習が難しいものの一つである。先行研究において、指導が必要であることは指摘されているが、実際には日本語教育の現場で十分な指導がされているとは言えない。カタカナ語について調査研究を行い、実証的な検証を積み重ねることで、効果的な学習のための教材や教授法を開発することが重要であると思われる。畑・山下（2010）でカタカナ語の聞き取りによる調査を行った結果、長音や促音等の特殊拍の誤りと濁音・半濁音の誤りが多く、誤用には母語の影響と思われるものもみられた。

そこで、本研究では、最も誤りの多かった長音を中心としたカタカナ語の指導がどのような効果を及ぼすのか検証した。中級の韓国人学習者35名を指導群と統制群の二群に分け、指導群には拍に焦点をおいた指導を行い、指導後、両群に指導前と同様の聞き取りテストを行い、結果を比較し分析した。その結果、指導群は指導後に誤用が減少し成績が上がった。特に、長音をはじめ特殊拍の誤りが減少した。また、調査後に行ったカタカナ語に関する意識調査の結果から、カタカナ語に難しさを感じる学習者が多く、その多くが指導を望んでいることが明らかになった。さらに指導効果の検証を重ね、より効果的なカタカナ語彙の指導法と教材の開発を目指したい。

キーワード：カタカナ語、外来語、聞き取り、誤用、語彙指導

투　　고：2010. 11. 30
1차 심사：2010. 12. 11
2차 심사：2011. 1. 08

www.kci.go.kr